

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

補説西野義雄のこと：久田アレハンドロさんからの手紙

著者	千野 明日香
出版者	法政大学文学部
雑誌名	法政大学文学部紀要
巻	58
ページ	1-11
発行年	2009-03-10
URL	http://hdl.handle.net/10114/3524

補説西野義雄のこと——久田^くアレハンドロ^ださんからの手紙

千野 明日香

本稿は、五六号に掲載した一文、「原阿佐緒『涙痕』考——西野義雄のこと」を補充する資料である。

五六号で述べたように、西野義雄は広島の一文学青年であった。大正二年、二一歳の西野は独力で原阿佐緒の処女歌集『涙痕』を出版し、阿佐緒を歌人として世に送り出した。

この頃西野は世界を放浪して一生を終えようと決意しており、『涙痕』は日本での生活を「記念」する意味を持っていた。

出版直後の大正二年八月、西野は横浜からペルーに向けて船出する。西野はこのとき、『涙痕』と阿佐緒の黒髪を携えていたと思われる。

五六号で簡単にふれたように、離日後の西野については、生涯を放浪のうちに過ごし、昭和四八年にアルゼンチンで亡くなったこと以外、詳しいことはわかっていなかった。昭和三年から九年にかけて、当時の『アルゼンチン』社長で、友人の新宅隆一^{しんたくりゅういち}に宛てた手紙五通からは、わずかにつぎのようなことが読み取れるだけである。

まず、放浪生活を送りながらも、西野は原阿佐緒に対して思慕の念を抱き続けたらしいこと。昭和四年に日本に一時帰国して一年程度滞在し、その間阿佐緒に会う機会もあったのに、会おうとしなかったこと。結局、

西野は生涯阿佐緒と再会することはなかった。

上記の書簡以後の西野の足跡、ことに晩年の生活については、何も手がかりがなかった。西野はその後どのような生活を送ったのだろう。出版以前に出した原阿佐緒への手紙に、西野は世界を放浪した末、歌集を手息絶えるつもりだと書き残している。若い日の夢は歳月とともに忘れ去られるものだが、西野の場合はどうだったのだろうか。

幸いなことに、筆者の事情を知ったアルゼンチン日本人移民資料館 (Archivo Histórico del Inmigrante Japonés en la Argentina) 責任者、久田アレハンドロ氏が現地の邦字紙『らぶらた報知』記者、崎原朝一^{さきはらあさひち}氏に問い合わせてくださったところ、西野氏と同居していた土井リカルド氏の名が浮かび上がった。その後、久田氏は二〇〇七年二月一四日、土井リカルド夫妻を取材し、自身で見つけた材料も加えて、筆者に手紙を送ってくださった。同年一二月下旬のことである。

久田氏の手紙から、筆者は西野の生涯のおおよその様子を知ることができた。

西野は、ペルー、チリ、アルゼンチンだけではなく、アメリカにも滞在していた。

アルゼンチンの邦字紙等に発表した文章からは、西野が生涯にわたって芸術家に対する尊敬の念を抱いていたことが伺える。その根底には、創作者としての阿佐緒の面影があつたのかもしれない。

また、土井夫妻の話からは、西野の晩年の生活と終焉のもよう、埋葬地を知ることができた。

西野は節度ある人柄で、周囲の信頼を得ていたらしい。死期を悟ると、すべての持ち物を処分して何も残さなかった。今となつては想像するしかないが、『涙痕』と髪も、そのとき処分されたのかもしれない。

久田氏の手紙はきわめて貴重な資料と思われる。そこで、同氏の了解を得て、以下に手紙の全文を掲載することにした。また、土井リカルド氏から、土井家に保存されていた三枚の写真を提供していただいた。これも貴重な資料なので、氏の了解を得て、併せて掲載する。

なお、手紙の原文には無かったが、読みやすくするため、千野が便宜的に(一)から(五)までの章立てを加えた。また、【】は注を示す。注は、久田、千野が適宜加えた。

久田アレハンドロさんの手紙

こちらは暑い日が続いておりますが、日本は、今頃冬本番でしょうね。以前お話ししたことがある、西野義雄氏とコンタクトのあった土井家ですが、崎原さんがきっかけを作ってくれたので、今月一四日の金曜日に、土井リカルド、エレーナ夫妻から取材することができました。夫妻が、

資料館の作業室まで来てくれました。

残念ながら、全体として手がかりはそう多くありません。土井家の取材以外は、公文書などの記録、西野氏本人の発表した何編かの文章があるぐらいでしょうか。

私の研究テーマは移民史ですが、今回はいろいろと考えさせられました。過去の個々の移住者の足跡をたどるのは、本当に難しいことです。一歩踏み込んで、その人物の性格や心持ちなどを知らうとすれば、さらに難しくなります。

土井家の取材についていえば、かつて一つ屋根の下で暮らしていたとはいえ、西野氏のようにスペイン語が母語ではない一世について、二世のリカルド氏、非日系アルゼンチン人の奥さんのように、日本語を話さない人々から聞き取る難しさを痛感しました。

感想は色々ありますが、以下、とりあえずわかったことをお伝えします。

(一) 一九一〇年代——離日とペルー入国

ペルー移民資料によると、西野氏は一九二三年八月二五日、横浜港から移民船の紀洋丸で出航、同年一〇月二日、同国のカヤオ港に到着しました。契約移民二一四人のうち、西野氏をふくむ広島県人七人は、サトウキビ耕地カニエーテ(Cañete)に配属されています(『在ペルー邦人七五年の歩み』ペルー新報社編、同社発行、一九七四年)。

カニエーテ耕地はペルー邦人移民の発祥地ともいわれていますが、とくに大正中期は、気候風土や食物に馴染めず、過酷な労働条件なども重

なつて脱耕者が続出しました。辛苦の末チリを経て、アルゼンチンに転住した人も数多くいました。

たとえば、西野氏より一足先、一九一三年六月二〇日に安洋丸で横浜港を後にし、同耕地に着いた愛媛県の中谷^{なかや}和一^{わいち}氏です。氏は、たった数日でカニエーテを離れると、ペルーの首都リマ市に逃亡し、アンデス山脈を越えてアルゼンチンに定住しています（『アルゼンチン日本人移民史』第一巻戦前編、在亜日系団体連合会編、同会発行、二〇〇二年）。

逃亡した移民、あるいは同耕地を離れることなく契約満期を迎えた人の多くは、日本へ帰国するか、またはそれまで得た小資本で、理髪店や雑貨店などの店舗をペルー他の南米の地で構えたといわれます。当時の国境での入国管理は決して厳しくなかったたので、移民たちは国境線をほとんど気にせず、よりよい待遇、条件を求めて自由奔放に移動したようです。

（二）一九二〇年代——アルゼンチン入国と日本への一時帰国

アルゼンチン側の資料によると、西野氏是一九二一年にアルゼンチンへ入国したとあります（『アルゼンチン同胞五十年史』賀集^{がしゅう}九平^{くへい}著、誠文堂新光社、一九五六年）が、これは日本を離れた一九一三年から、この年入国するまで、ずっとペルーに滞在したことを意味するのでしょうか。もしそうだとすれば、ペルー側資料になにか残っている可能性があります。ペルーでは、一九一二年に日本人協会が創立されました。この日本人協会を中心に、翌年、南米最古の邦字紙『アンデス時報』が創刊されていますので、西野氏が何か執筆しているかもしれません。

一九二一年、二九歳の西野氏が踏んだアルゼンチンの景気は、大戦後ヨーロッパの不況のあおりをうけ、低迷していました。当時のほとんどの同胞は、牛肉冷凍、靴や織物などの工場で働いたり、上流家庭の奉公人になったり、カフェ店で皿洗いや給仕をしたりしていました。これらがアルゼンチンにおける邦人社会の経済基盤になっていきますが、当時、西野氏が何をしていたかは不明です。

徹底して西野氏の文章を搜したわけではありませんが、見つけたもののうちから、ここでご興味がありそうないくつかに触れてみることにします。

当時ブエノスアイレスで発行されていた邦字紙の一つ、『亜国時事』一九二四年新年号に、西野氏は「西野七子」の筆名で、短編小説「死の舞踏」を寄稿しています。

この小説の主人公「井上芳郎」には、西野氏自身がかなり自己を投影した部分があると思われられます。

世界を放浪中の井上は、目下ブエノスアイレスのカフェ店で働き、「多くの人達から貰った心附で生計してゐる」給仕です。数年前、放浪生活を始める前に、満州鉄道に勤務する叔父の家がある大連市で、ロシア人女性マスロワと知り合いました。このときのマスロワは、無名の「美しい踊り女」でした。その頃、「何の根底もなしに唯露西亜の思想や芸術に心酔して随喜の涙をこぼしてゐた彼【芳郎】は旅芸人の群れにゐるマスロワが隠れたる天才でもあるやうにも思はれて彼女をさうした雰囲気から抜いて一流の舞踏家として、謳はれる道を教えてやる事が自分の使命でもあるやうに」覚えたことがあります。

芳郎は、そのマスロワがその後高名な舞踏家となり、公演のため、母親とともにブエノスアイレスに来ていることを知ります。芳郎はマスロワとの再会を図り、彼女が宿泊しているホテルに行きます。

マスロワと再会した芳郎は、彼女の心身の荒廃を感じとります。「美しい額にはもう皺が見られた。彼は円熟した芸人の荒むだ体といふことを思った」。マスロワは、変わっていました。「自己の芸術に対する敬虔も苦悶も創造もなかった。自分の舞踏は生活の糧だ売物だという捨鉢な性格を持つ女であった。雑談は彼を可なりに失望させるものが多かったが、彼女が無理解のうちに持つてゐる貴いものに彼は矢張り尊敬を払うことを忘れなかった」。失望はしたもの、芳郎は彼女の芸術家としての素質には敬意を持ち続けます。

最後に、男性三人にそのかされて、この名高い舞踏家は、ブエノスアイレス市に実際あるチャカリタ墓地内で「死の舞踏」を舞うこととなります。芳郎も見物に行きますが、墓地での舞踏が芸術ではなく「死の侮辱」だと感じ、いたたまれなくなつてその場を去ります。芳郎は、翌日、新聞でマスロワとその場にいた者たち全員が警察に逮捕されたことを知ります。

この小説に非常な文学的な価値があるかと問われれば、うべなうにはちよつと疑問が残るかもしれません。幻想的な世界というより、ある時見た夢をそのまま追っていき、最後の方は適当に終わらせたという印象も受けないわけではありません。しかし、芸術を尊び、無名の踊り子の背を押して世に出してやりたいと考える芳郎とマスロワの関係は、かつての文学青年西野義雄と歌人原阿佐緒との関係を連想させるものがあり

ます。

西野氏がこの小説を発表したのは一九二四年ですが、その三年前の一九二一年、原阿佐緒は石原純との関係が新聞や雑誌でスキャンダル報道され、深く傷ついています。西野氏はこの事件を知って、思いを寄せる阿佐緒にメッセージを含めた文章を書いたのでしょうか。

もう一つご紹介します。千野さんによると、西野氏は一九二六年に父を亡くし、三年後の一九二九年に帰国の途についたようですが、この帰国前に書いたと思われる小説があります。

当時、アルゼンチン日系社会の代表機関である在亜日本人会の機関誌『在亜日本人』一九二八年一月号に、西野氏は前記作品と同様「西野七子」の筆名で「帰郷来」と題する小説を寄稿しています。

主人公田上は日本へ帰国する間際で、年齢は「三十五歳」という設定です。このとき西野氏は三六歳です。素朴に考えて、これも自伝的要素が濃い作品と考えていいのではないのでしょうか。



中年期の西野義雄氏。撮られた年代は不明。

この作品は、田上が、帰国する船の甲板で、見送りの親友水沼と、移民生活、愛国心、道徳、学問、名誉などをめぐって激論を交わすという構成になっています。

水沼は、年にしては「ちと老けやうが非道い」田上が、「未だ世間慣れない青年の云ふこと」を言い、「無暗に真理ばかり追っかけ歩く」と批判し、自分の妹と結婚するよう勧めます。

しかし、田上は、「結婚には本人同士の諒解ということが眼目なのだ……。僕は好い加減にシー【イエス】、ノーでお座を濁すことは大嫌ひだ」と断ります。「田上にしてみれば帰国しても繁類はない駄だから、この親しみ合つた友の口から、現在の妹をと熱心に奨められれば、渡りに船で、二つ返事は無い筈だが……【中略】深刻な生活難の渦く日本での生活を、どう切抜けやうと考へると、それどころではなかつた」。

作者は地の文で、田上の気持ちを「然し世の落伍者の持つ偏狭さは、相手の純真な情誼に対してさへ、むらむらと唆られる一種の反抗心に他愛なく駆り立てられるに過ぎない」と語っています。水沼の申し出を断つた主たる理由は、生活のめどが立たないという事情なわけですが、それのみではなく、「落伍者」としてのひけめから、親友の好意を素直に受けることのできない屈折した気持ちも強かつたという意味でしょう。主人公田上の屈折は、そのまま西野氏の屈折であつたかもしれません。一九二九年、いったん日本に帰国した西野氏は、一九三〇年、東京から『亜爾然丁時報』新年号に寄稿しています。

同紙についてですが、関係者によりますと、当時の邦字紙には外部の協力者や多くの居候がいて雑務を手伝つたりしましたが、実際月給を受

け取つてずつといた人は一人か二人しかいなかったようです（新宅イシ氏証言「聴きとりでつづる新聞史」『別冊新聞研究』第一九号、日本新聞協会、一九八五年）。西野氏は、アルゼンチンへの再渡航後もとどこき同紙に稿を寄せています。書くのは好きで、同紙との関係も悪くはなかつたとみえますが、就職した気配は無さそうです。

（三）一九三〇年代——アルゼンチンへの再渡航

千野さんによると、帰国しても原阿佐緒に再会することはなかつたようですが、一九三〇年、西野氏は日本を離れ、再びアルゼンチンに向かいます。プエノスアイレス港に降りた船客の名簿を見ると、西野氏はラプラタ丸の三等客として横浜港を発ち、同年一〇月一四日、アルゼンチンに再入国しています。

当時は、移住の手続きには「呼び寄せ人」が必要でした。西野氏の呼び寄せ人欄には、当時の『亜爾然丁時報』の社長、水野勉氏の名があります。ここで目立つのは、西野氏の職業です。同船の移住者たちの職業がたいてい「農業者」または「使用人」であるのに対し、西野氏だけが「委託販売業者」となっています。

「委託販売業者」については、確証があるわけではありませんが、西野氏が水野氏の商売を手伝つていたことを意味するのかもしれませんが。

時報社長の水野氏は新潟県出身で、東京外国語学校を卒業後、一九一五年アルゼンチンに渡航し、一九二四年五月、同紙を謄写版印刷で創刊しました。積極的に社交家として知られた水野氏は、新聞以外に色々と事業を手がけ、そのうち「一時は友人の大西さんという人と一緒になつ

て日本の輸入品を地方に販売してい」たといいます（安東定夫氏証言、「聴きとりでつづる新聞史」前掲『別冊新聞研究』）。この大西さんとは、おそらく地方のコルドバ州コスキン市でクリーニング店を営みながら日本からの輸入業に携わっていた大西佐一郎氏のことだと思われます。

ところで、アルゼンチンに帰った西野氏の、当時の芸術観をかいまみることができそうな座談記事が残っています。

『亜爾然丁時報』一九三一年五月二五日のアルゼンチン建国記念日特集号に、「アルゼンチン・タンゴの座談会」というのが載っており、司会者兼記録者は西野氏です。参加者は彼をふくめ六人で、他は皆「仁保浦人」、「南山破夢」といった戯作者めいた名前を名乗っていますが、氏だけは「七子」とのみ署名しています。

座談の中で、参加者の一人が、ある著名なタンゴ作曲家の嘆きにふれます。その作曲家は、タンゴにはどうしても表現できない「韻律パツシヨン」があるので、向後はタンゴではなくワルツの畑を開拓したい、と言ったらしいのです。その話の流れで、七子は次のようなコメントをもらしています。「それは総ての芸術家が創作に際して感じる通有の焦躁ではないでせうか？ 吾々は現在では未だ自己の意志や感情を微妙に完全に表現する機能を與へられてゐないのでから、Filiberto【フィリベルト。前記のタンゴ作曲家】が例へワルツに走つてもタンゴの場合と同じ障壁に直面するだらうと思ひます。人間は誰でもが一生を通じて表現出来得ない微妙な感情を抱いて墓場に這入つてゆくものです」。

このコメントからは、西野氏が、芸術家が創作する際に人生の真実を直視することがどれほど大事だと思っていたかが伝わってきますが、そ

の背景には、彼が思いを寄せる阿佐緒の姿が浮かんでみえる気がしてなりません。

その後、一九三七年から、西野氏は在亜日本公使館【一九四〇年一月、大使館に昇格。それまで、アルゼンチンにおける日本公館は公使館であった】で「同盟ニュース係」を勤めていました。当時の住所、ブエノスアイレスの「Reconquista 街33番地」は、公使館の所在地です。

同盟ニュースについては、はっきりしませんが、おそらく当時の日本の同盟国、ドイツ、イタリアに関する情報だと思われます。土井リカルド氏は、西野氏が、「第二次大戦時、在アルゼンチン日本公（大）使館【リカルド氏の使った言葉は、英語の embassy にあたるスペイン語 embajada。公使館とも大使館ともとれる】で暗号解説に当たっていた」と語るのを聞いたことがあるそうです【崎原朝一氏は、同盟ニュース係とは、第二次大戦中、同盟通信社のかかわっていた情報収集の仕事ではないかという。ブエノスアイレス支局では、インテリ数人が参加してアメリカやラテンアメリカ諸国の情報を収集していたらしい。当時の支局長は、後にアルゼンチン大使となった津田正夫氏】。

西野氏はいつまで同館に勤めていたのでしょうか。一九四五年三月二七日、アルゼンチン政府の枢軸国に対する宣戦布告後、日本大使館関係者一〇〇人近くは軟禁され、日本へ強制送還されました。しかし、送還者の中に名前が見あたらないところを見ると、西野氏はこの事件が起こる前にここを辞めていたようです。

(四) 一九四〇年代から七〇年代——土井家での生活

つぎに、先日の土井家取材について書きます。

晩年の西野氏は、ブエノスアイレス郊外シウダデーラ市にあった同郷人土井増吉氏の店で働き、増吉氏の死後も土井家に留まって一生を終えました。その死を看取ったのは、増吉氏の長男で現在の当主、土井リカルド・増雄氏です。



一九四〇年頃の土井増吉夫妻と子どもたち。男児はリカルド・増雄、女児は妹のアマ ندا・照子。

リカルド氏は現在も同市に住み、非日系人の知り合いが経営する会社に勤めています。氏は大声で誇らしげに、「僕は日本人だ」と言っていました。立ち居振る舞いや話し振りは紛れもなくラテン系アルゼンチン人のものです。一九三八年生まれで、一九七二年、ヨーロッパ系アルゼンチン女性エレナ氏と結婚しました。

西野氏とリカルド氏とのコミュニケーションはスペイン語によるもので、今回の取材（二〇〇七年二月一日とその後日）もすべてスペイン

語でした。

まず、先代の増吉氏についてですが、リカルド氏は、両親の誕生日や出生地などを、はっきり記憶していませんでした。しかし、いくつかの資料から得た情報をまとめてみますと、増吉氏は、広島市草津出身で、一九一四年に弟の友吉氏、一九一七年に兄の直太郎氏につき、一五歳で一九二三年に着亜しています。一九二三年に一五歳なら、増吉氏は一九〇八年（明治四一年）生まれだったということになります。

いくつかの職をへて、兄たちとも一緒に働いた後、一九三〇年代初めに独立したそうです。それから、同じ広島県人の妻を呼び寄せ、リカルド氏と妹たちが生まれました。母は父よりも少なくとも一〇歳は年下で、旧姓は「モリハラ」といいました。モリハラ家は、広島で由緒ある家柄だったそうです。

土井家の三兄弟は、ブエノスアイレス西部郊外への邦人進出の先駆者でした。それぞれクリーニング店を開いた場所の地名が、日系社会ではそのまま固有名詞として定着しており、リカルド氏の場合は「シウダデーラの土井」と呼ばれているそうです。

ところで、一九六七年在亜日本人会が発行した『在亜日系人名録』に、「西野義男」の名前と住所、「Rivadavia大通り1862番地」が載っています。

「義男」は「義雄」の誤りなわけですが、リカルド氏によると番地も間違っており、正しくはシウダデーラの同大通り「1262番地」で、そこに父増吉が開いた店舗と自宅を兼ねたクリーニング店があったそうです。

西野氏は、リカルド氏が物心ついたときから、増吉氏の家に小さな部

屋をあてがわれ、住み込みのアイロン掛け職人として働いていました。店は、景気のいいときには四、五人もの住み込みの職人を抱えていたそうです。

西野氏が、増吉氏とどのように知り合ったかはわからないようですが、広島県人が催した集まり、おそらくは頼母子講がきっかけになったのではないかと思います。

エレナ氏によると、西野氏はスペイン語は良く使いこなしましたが、一世の特徴として、定冠詞を使用しなかったということです。

夫妻によると、西野氏はまっすぐな性格の持ち主で、紳士的で、必要以上には物を言いませんでした。気分によっては何もしゃべりたがらない日があり、そういう日は話の仕様がなく、ただ挨拶のみで、自分の部屋に入ってしまったそうです。

西野氏は、よく読書していました。その内容はよく分かりませんが、たしか『中央公論』も読んでいたといっています。

毎晩仕事が終わったあと、眼鏡をかけ、ズボンの裾を捲り上げて椅子に座り、アイロン用の大きなボイラーから汲んだ湯を満たしたたらいに足を浸しながら、読書に没頭していた西野氏の姿を、夫妻はよく思い出しています。

アイロン掛けというのは、ひたすら同じ場所に立ち、アイロンやボイラーの蒸気を吸い込みながらする作業で、とくに足に負担がかかるのだそうです。

アイロン掛けについては、西野氏は腕のいい職人で、当時流行っていたウールの帽子に掛けるのが得意だったといっています。

万年筆が特に好きだったようです。折りたたみ式の剃刀も好きで、リカルド氏は剃刀の使い方や掃除の仕方を教わったそうです。

経済的には別に不自由はしていませんでした。父増吉氏は、毎週土曜日、職人たちに手当てを払っていました。不景気その他で払えないときがあっても、西野氏が文句を言わず静かに受け入れていたのを、リカルド氏は覚えていそうです。

土井家には、西野氏はある女性との間に子どもまで為したのに、大失恋したあげく、日本を離れたという伝説が伝わっています。夫妻は、増吉氏から、その子どもは後年、有名な俳優になったと聞いたことがあるそうです。【原阿佐緒の次男原保美氏（大正四年一月生）はテレビ、映画俳優として活躍した。増吉氏の話はそのことと関係があるかもしれない。ただ、原保美氏が西野氏の息子である可能性は無い】



土井リカルド氏によると、撮されたのは一九三〇年代。中央で葉巻を手にしているのが西野義雄氏。後左端より土井直太郎氏（父増吉の兄）、土井友吉氏（同弟）の妻。右端ははっきりしないが、広島県出身の三宅氏の息子かもしれない。前の大人は広島県出身で古い移住者の沖田氏。

自分の過去についてはほとんど語らなかったそうです。ただ、わずかに語ったことの中に、アメリカでの生活があります。西野氏は一時期アメリカの映画会社RKO社で働き、Errol Flynn【エロール・フリン】ら著名な俳優とも面識があったということでした。会社での役割は、現場での必要に応じて、道具や衣装を日本的にアレンジするための顧問だったようです。

ときどき、週末に、きちんと着飾って外出することがありましたが、女性と交際をしていた気配はありませんでした。西野氏と同じ広島県人や、邦字新聞の記者とはたびたび会っていたようです。

(五) 一九七三年——終焉その他

リカルド氏の父増吉氏は、食道癌で一九六四年に亡くなりましたが、西野氏は、かねてリカルド氏に「あなたのお父さんと同じ原因で死ぬ」と言っていたそうです。

晩年のある日、リカルド氏は、西野氏があまりに食欲がないのを見て、「体の具合が良くないようだから、お医者さんに診てもらいましょう」と勧めましたが、西野氏はいったん断ったそうです。リカルド氏は、「あなたは日本に家族もいますし、僕は彼らに対して責任がありますから」と言って西野氏を説得し、医者にかけましたが、食道癌とわかったときはもう手遅れでした。

病気の性質上、食物を嚥下すること自体容易ではないのですが、西野氏は食事を摂ろうとしないばかりか、点滴のチューブなどを故意に外したりし、「もう生きたくない、みんなにもう迷惑をかけたくない」と言

って、息を引き取りました。

亡くなったとき、過去を窺わせるような物は何も遺しませんでした。死期を悟り、全部自分で処理したそうです。

夫妻は、「サムライとして生き、サムライとして亡くなった」、「打ち明け話をするような人ではなかったので、何か秘密があったのなら、あの世に持っていくたのでしょう」と言っていました。死後、西野氏の遺骨はブエノスアイレス市西部近郊モロン市営墓地に納められましたが、その後墓地使用の期限が切れ、遺骨の行方は不明になりました。

一九六四年、増吉氏が亡くなったとき、西野氏は「独身者が同じ屋根の下で未亡人と暮らすのはよくありませんから」と言って、家を出ると言い出しましたが、未亡人をはじめ、家族が説得して残ってもらったそうです。

その後は、店のことだけではなく、母、リカルド、妹二人からなる家族のこともいろいろと面倒を見てくれて、家の主人のような面もありました。リカルド氏は、「第二の父のようだった」と言って涙ぐんでいます。

以上が、リカルド夫妻が語ってくれた西野氏の人物像です。

夫妻が、サムライとして生き、サムライとして死んだという西野氏の人柄は、もしかしたら、発表した文章に一番よく表れているのかもしれない。

「帰郷来」の主人公田上は、「ブエノス・アイレスといふ都会ほど何から何まで浮薄な移民根性がこびり付いてゐる場所は、その厖大さに於いて世界に類が無い。茲に一つの比喩がある——よく、家庭などに奉公

した雇人達が後日一家を構へた場合、曾て見た御主人達の生活振りを（それらの中には其人独特の趣味性と遊戯気分がごつちやになってゐることには考へ及ばず）見様見真似に自分の生活の上に当嵌めやうとする——それがこのブエノスの都会振りの全部であるのだ。其んな植民地で云^{うんい}為する方が無理かも知れないが、何處に胸を躍らせるやうな民族性の発露がある？ 血の滴るやうな尊い創造は永久にこの都会から生れるものぢやない！」と批判しています。

こういう鋭いことばは、遠慮がちな邦人社会が生んだ文章の中には、あまり見られない気がします。田上が西野氏の分身だとすると、西野氏は鋭く厳しい意見を吐き、信念をまげない性格だったのではないでしようか。そうだとしたら、当時の邦人社会では敬遠されがちな存在だったかもしれません。

しかし、たとえそうであつたとしても、おそらく生涯を通じて「血の滴るやうな創造」を尊いものと考え続けた西野氏に、私は尊敬の念を感じざるをえません。あの「無理解のうちに」「尊い」芸術性を持っていたマスロワも、実は西野氏の分身だったのではないでしようか。

今後も、彼の文章を見つけたら、気をつけて読んでみたいと思います。また何かありましたら、お知らせします。千野さんも、ぜひ原阿佐緒の研究を続け、彼女の歌の魅力を広く紹介してください。楽しみにしております。

久田アレハンドロ (Alejandro Kuda)

Excursus “On Yoshio Nishino” — A letter from Mr. Alejandro Kuda

SENNO Asuka

Abstract

This paper provides supplementary information to “On Yoshio Nishino and Asao Hara’s *Ruikon* ” (Issue No. 56). As written in the preceding issue, *Ruikon* is Asao Hara’s first anthology of tanka poems that was independently published by a literary youth, Yoshio Nishino of Hiroshima.

In March 1913, at the age of 21, Nishino decided to leave his country to spend rest of his life as a nomad. He published the anthology to commemorate his home country and to take along in his travels. In August of the year the anthology was published, Nishino departed Japan in an emigrant ship and headed for Peru.

The preceding issue does not sufficiently touch upon Nishino’s life after his departure. Fortunately, I received a detailed research report on Nishino’s later part of life from Mr. Alejandro Kuda, an expert on history of Argentinean and Japanese immigration immediately after I had completed the paper. With Mr. Kuda’s permission, I will include the entire report in this paper.